平成13年7月12日

淀川水系流域委員会 殿

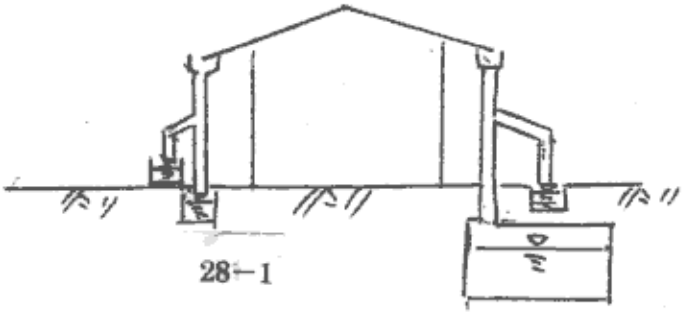
橋本 崇弘

私、個人としての意見であり小さな身近な事柄でありますが、淀川水系流域の整備について検討して行く過程で考えられるのでは、又は、考えてほしいと思う点と希望とを列記させて頂きます。
「マンガ」だとお笑いになる提案もあろうかと思いますが、ご検討の一端に入れて頂ければ幸いです。

日本の河川の最大の特徴は、短い山岳河川で急勾配のため、降雨水や融雪水が地上に滞水すること無く短時間に流下してしまうという欠点を有している事です。これを克服する為に、ダムを設けるだけでなく、色々の工夫がなされてきたし、生活の中で完成された棚田、溜池、遊水池、樹林の山の整備、および里山の整備が日々なされ、ある程度の治山・治水自助浄化が確保されてきたと言えるが、戦後の人口の増加、経済優先、燃料の変化、能力優先の社会情勢が棚田を畑に、または宅地に自然の遊水池の干拓そして畑や宅地に森林の放置や宅地開発、道路の不透水層化等々の為、地上での滞水、貯水能力が激減している現在を考える時、堤防を大きく高くする、ダムを多く設けるのみでなく下記のような事柄も合わせ考えるべきではなかろうかと思います。

［1］ 流入河川の両岸斜面(特に地山の地点にて)に、今からでも棚田的なものを。
一時滞水すればそれでよい溜る土質には、カキツバタやセリ等を植える。又河川の周辺の空地に遊水池用溜池を設ける。これも一時的に滞水すればよし、干し上がればグランドとして使用、又ゴルフ場内にもっと一時滞水用溜池の設置を義務づける。

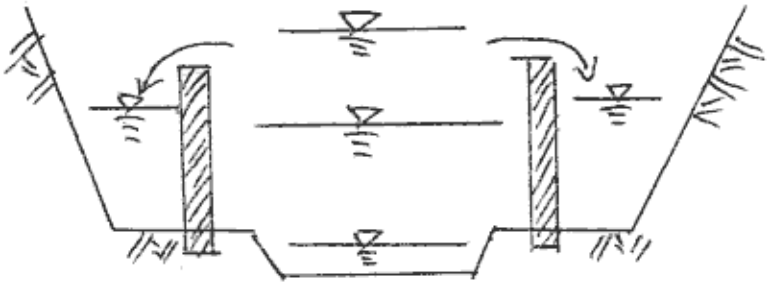
［2］ 各家庭や、公共建物の屋上の降雨水の利用
例えば、家庭の場合、庭を一度通過してから、側溝に流下させる又、樋より貯水する。公共建造物などは、即にでも可能と思う。縦樋を分岐型にして、直下、貯水と切り替えられるようにすれば相当量の滞水,貯水が出来,節水にもなり河川流下能力の確保にもなる。(川道の地下トンネルダム等は存じております)



［3］河中の遊水用ダム

洪水時のみでなく,小雨の時でも少しでも河川が増水した時の水を溜め、自然透水流下させる遊水ダムを河道の中に設ける。

河岸が地山となっている個所などに、ある高水位に達すると中間壁を越水して貯水させるというもの。



［4］琵琶湖東岸の津田内湖の一部復元可能性を願って、市は滋賀大学と組んで検討を開始しているとの事ですが、83ha に 1～2ｍの水位が保つ事ができれば、どれだけの影響があるかわかりませんが、ヨシの増殖も含んでいるとの事。近江八幡市のみに検討を任せるのでなく,委員会としても積極的に参画するべきではないでしょうか。

［5］堤防の構築は大変な事と存じますが台風時の洪水で、三川合流地点(木津・淀川・桂)が洪水となった時など堤防が、ｸﾞﾆｬｸﾞﾆｬと動き、誠に恐ろしいものであります。(昭和35年～45年代の経験ですが) これで少しでも越水が始まれば堤防は、ひとたまりもないと思いました。

高水位域上部の補強や工法を考えるべきではと思いますが。

［6］先日（6/18）の委員会に於いて「アユ」の放流前の「アユ」の発見というお話しが出ていたかに記憶しておりますが、それは「アユ」のそ上だけでなく、私は京都の疎水の影響があるのではと考えます。

特に、第２疎水連絡トンネルが完成した頃からではと思っておりますが、あくまでも推測でありますが。

［7］環境を考える時

イ 琵琶湖の東岸津田内湖の復元とヨシの植栽や琵琶湖全体としてのヨシの増殖が環境問題と共に言われて久しいが、ヨシの話が出ると以前朝日新聞にでていた、滋賀大学の鈴木紀雄先生の「水の話」のコラムを思い出します。

ドイツのヨシ群落保護と日本の考え方、取り組み方の相違であります。

ロ 以前、滋賀県では、ゲンジボタルの保護と繁殖を願って、大津の千丈川、守山の守山川など５河川の改修にコンクリート製のホタルブロックを採用した所、ホタルは激減してしまったとの事であります。

以来約 10 年ほど過ぎいる現在は、元に戻ったかもしれませんが、同じ使用するにしても、コンクリートの表面を風化させたものを使用するとかの工夫、又もう一工夫する事が必要ではなかったか。これからも、自然石を置いたから自然になった、川を蛇行させたから自然になった、休耕田は放置するか維持管理するかなど、周辺事情や地形、地域をよく考え何事も易安に、単略に行為を進めないよう願うものです。

ハ 間伐材の利用の拡大を

治水・治山の元となる山林の樹木は放置せず、良い育成が可能なよう維持管理する要があります。間引き、下草刈、落葉樹の増林などであります。間引きした、木材を山間部の河川、道路の簡易構造物や、親水護岸やえん提などにもっと積極的に間伐材を利用するよう働きかけるべきではなかろうか。

以上